

生きる勇気を贈る

岩手県北上市立北上中学校

二年 有馬 環

夕日が海に反射して輝いています。海面には、水平線まで続くオレンジ色の一筋の道ができています。一枚の紙に描かれたイラスト。転校してしまつた親友が、私のために描いて、プレゼントしてくれました。このイラストを見ていると、私の心にくつもの物語が生まれてきます。二人の少女の友情の物語だったり、病氣の子が海に憧れる物語だったり。いくつものパターンで、主人公たちが行動を始めるのです。

小学校に入る前から、お話を読むのが大好きでした。小学生の時には、姉と好きなキャラクターを主人公にして、お話を作るといふ遊びに夢中になりました。成績優秀で友達も多い歳の離れた姉に、対等に相手をしてもらえるのがうれしかったです。周りの人にほめてもらえることもあって、想像力だけには自信を持つようになりました。また、親友が「物語を書く人になりたい。」と言っているのを聞いて、「私も。」と思うようになりました。家でも学校でも、想像の世界に入りすぎていて周りの人に注意され、現実の世界に戻って来るといったようなことも度々ありました。

中学生になり、ノートに書いていたものを国語の

先生に見ていただくことになりました。先生は、「物語を書いている」ということをとても喜んでくださり、読んだ感想もいただきました。そして、出品できるようなコンクールをネットで探し、紹介してくださったのです。私は、意気揚々と出品しました。賞に入ったなら、絵本として出品してもらえたら。親友に挿絵を描いてもらおう。夢がふくらみました。ところが、結果は落選でした。がっかりしました。落ちこむ私に、母が言いました。「一人よがりじゃなくて、もつと読んだ人が元気になるような話を書いたら。」

その言葉が胸にぐつとききました。悔しい気持ちで落ち着くと、「私は、だれのために、何のために物語を書いていたのだろう。」という自問自答が始まりました。読み手のことを意識せず、自分が思いついたことをわかってもらえるはずと思ひ込んで、ただ書いていかなかったか。もしかしたら、姉への劣等感を取り除くための手段として書いたのではなかったか、とも考えました。そして、自分を主張するだけの物語では、読む人の心をとらえることはできないということに気付いたのでした。

私は、古典の作品が大好きです。紫式部の「源氏物語」や清少納言の「枕草子」は、時代がどんなに変化しても、人間の心は変わらないということを感じさせてくれます。自分の思うことを書きながら、読み手に「そうそう、わかるわかる。」と思わせる作品です。また、知っている古典作品は少ないけれど、国語で学んだ、「優れた作品は、時代をこえて読み手に共感を与え、メッセージを送り続ける。」という意味はよくわかります。古典作品と比べるのもおこがましいのですが、私の創る物語にはまだ「共感」も「メッセージ」も足りないことは、明らかです。落選を機に、どんなメッセージをもって物語を

書きたいのか、真剣に考え始めました。私の書いた物語には、「死」や「別れ」といったことが出てきます。それは、親友との別れや身内の死、東日本大震災、世界で起こっている紛争などから感じ、考えたことで、自分としては、絶対に書きたいことです。つまり、「死」や「別れ」を乗り越え、成長していく姿を書くことによって、読む人に「生きる勇気」を持つてもらいたいのだと思います。こうやって、悩み、考えることで、おぼろげにあったものがはっきりしてきました。想像することが楽しい。自分で創つた物語にひたるのが心地よい。それだけでなく、読み手に「生きる勇気」を贈り続けられるような物語を書きたいと強く思うようになりました。

ありがたいことに、私の周りには、母を筆頭に、友達、先生と私の夢を応援してくれる人々がいます。とくに、母は、厳しいけれど大切なことを助言してくれます。わずらわしく感じたり、口論になつてしまつたりすることもありますが、なくてはならない存在です。なかなか、直接伝えるのは難しいけれど、感謝の気持ちをわすれないようにしようと思つています。そして、私は、もつとたくさん勉強しなければなりません。言語についての知識も、もつと必要です。自分以外の人の気持ちを考える体験もたくさん必要です。「生きる勇気」を贈るために、支えてくれている方々に感謝しながら、想像力だけでなく、総合的な人間力を持つて物語を創造していく。それが、私の挑戦です。

作文を書くに当たって

私の挑戦を応援してくださっている方への感謝を作文に込めました。無意識のうちに、迷惑をかけているかもしれませんが、嫌な顔をせず支え続けてくれる母や先生、友人と親友のおかげで夢を追い続けられています。支えてくださっている方々へお礼となるように、たくさんの勉強をし、夢を叶えたいと思います。